

令和 6 年 6 月 21 日現在

機関番号：32501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2023

課題番号：18K02799

研究課題名(和文) 知的障害児童・生徒の教材活用による実態把握と系統的学習教授法に関する臨床研究

研究課題名(英文) Clinical research on the actual situation and systematic learning teaching methods for mentally retarded children through the use of teaching tools

研究代表者

池畑 美恵子 (Ikehata, Mieko)

淑徳大学・総合福祉学部・准教授

研究者番号：00616352

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：知的障害児の多様な発達段階をふまえ、最重度から軽度・境界域までを対象とする実態把握の指標の整備を目的として、淑徳大学発達臨床研究センターが所有する「感覚と運動の高次化チェックリスト2007」の525項目について、過去の幼児および学齢事例の臨床データから再検討し、56項目を修正対象として抽出した。さらに新たなステージを1つ加え4層9ステージからなる「感覚と運動の高次化チェックリスト2022」を開発した。

また、教材教具を活用した系統的な学習指導のステップ化を目指し、主に感覚や運動、知覚的理解と操作の発達および前言語機能にかかわる初期段階の学習指標と数概念指導にけおける学習指標を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

心理検査や学校独自の実態把握票を用いて全生徒にアセスメントを行っている

学校は、知的障害校で6割、肢体不自由校で3割程度とされている。アセスメント結果を教師らが活用するにはさらに困難感があり、多様な発達段階・実態を共通した一つの視点で捉える指標が求められている。本研究では発達段階を重視したチェックリストを作成したことで、知的障害児の多様な発達段階と適応状態をおさえる実態把握指標を明らかにすることができた。また、実践的な評価や指導では自発を引き出す教材・教具の活用が柱になるため、それらを用いた系統的な学習指導のステップを示したことで、知的障害児童・生徒の学習保障と指導法について示唆を得られた。

研究成果の概要(英文)：In order to develop an index to grasp the actual conditions of mentally retarded children from the most severe to the mildest and borderline stages of development, we reviewed the 525 items of the "Development of Sensory and Motor Checklist 2007" owned by the Developmental Clinical Research Center of Shukutoku University, using clinical data from past infant and school-aged cases, and extracted 56 items for revision. In addition, one new stage was added, and the "Development of Sensory and Motor Higher Order Checklist 2022," consisting of four layers and nine stages, was developed. In addition, with the aim of stepping up systematic learning instruction using teaching materials and tools, we clarified learning indicators in the early stages of development, mainly related to sensory and motor skills, perceptual understanding and manipulation, and prelinguistic functions, as well as learning indicators for teaching number concepts.

研究分野：障害児発達臨床

キーワード：知的障害児童・生徒 実態把握 感覚と運動の高次化チェックリスト 教材活用 系統的学習教授法

## 様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

近年、早期療育や特別支援教育における知的障害、発達障害の支援ではアセスメント (Assessment) すなわち実態把握が最も重視されている。しかし、橋本(2016)が全国の知的障害、肢体不自由特別支援学校中学部に行った調査では、市販の心理検査ないし学校独自の実態把握票を用いて全生徒にアセスメントを行っている学校は、知的障害校で6割、肢体不自由校で3割にとどまっている。さらに「アセスメントの結果を学校・教師らは活用できているか」については、活用できている学校は3～4割と低調である。アセスメントツールを活用できない背景には、「教師の専門性や学校全体の意識」等、教育体制にかかわる要因の他に「生徒にあったアセスメントツールが見あたらない」「実態がおのおの違うため共通したアセスメント法が使用できない」等が挙げられており、知的障害児童・生徒の多様な発達段階と適応状態に対応する実態把握ツールが求められている。実態把握と指導法の両面を発達段階に応じて明確化することで知的障害児童・生徒の学習保障と指導法の整理が求められているといえよう。

### 2. 研究の目的

知的障害児童・生徒の発達は最重度から軽度の遅滞まで幅が大きいうえに、自閉症や感覚障害、肢体不自由等の重複、心理・情緒的課題の随伴など多様な状態を示す。支援・教育では発達の全体性や適応状態をとらえた多面的な実態把握と発達段階に応じた系統的な学習教授法が不可欠である。精神年齢や知能指数だけでは教育的支援の具体的内容について示唆を得にくい知的障害の特性をふまえると、自発的応答を引き出す教材・教具の活用が評価や指導の柱となる。そこで本研究では、学齢期の知的障害児童・生徒の多様な発達段階と適応状態に着目し、最重度から軽度・境界域まで発達段階を追って使用できる実態把握チェックリストを整備するとともに、教材・教具を活用した系統的な指導のための学習教授法のステップを明らかにすることを試みたものである。

### 3. 研究の方法

本研究の目的、ともに、実践フィールドは淑徳大学発達臨床研究センター(以下センターと記載)を中心とした。

- (1)実態把握チェックリストの整備については、センターの臨床研究で開発された「感覚と運動の高次化チェックリスト2007」の525項目について、過去の幼児事例と学齢事例の臨床データも含め妥当性を検証し、改訂版を開発した。特別支援学校および療育機関で実践に携わる教員・指導員にも、公開研修会の場合を用いて「感覚と運動の高次化チェックリスト2007」をもとに児童生徒の実態把握を依頼し、項目内容の修正の必要性を検討した。
- (2)教材教具を活用した系統的な学習指導のステップ化については、センターで2年～3年の臨床経過を追った事例を抽出し、大きく2つのグループに分けて検討した。一つ目は、主に感覚や運動、知覚的理解と操作の発達および前言語機能にかかわる諸側面の充実をねらいとする初期段階の指導事例である。もう一つは、象徴化、概念化の発達段階において数量概念の形成を課題とする指導事例である。数量概念の形成は、特に学齢期の知的障害生徒の学習では確実に組み込まれるものの、同時につまづきが表れやすい領域でもあり、学習教授法のステップ化を目指して検討を行った。

#### 4. 研究成果

##### (1) 実態把握チェックリストの整備

令和元年度から2年度にかけて、特別支援学校および療育機関で実践に携わる教員・指導員に「感覚と運動の高次化チェックリスト 2007」をもとに児童生徒の実態把握を依頼し、「解釈が難しい」「評価のための場面を設定できない」「使用する教材・教具が設定できない」等、実践現場で読み取りが難しく、活用しにくい項目の抽出を行った。回答者42名、対象項目329項目をもとに、計56項目の修正対象項目を抽出し、新たな表記の検討及び対応教材の抽出、補足説明の追記等の検討を行った。調査回答結果からのみ抽出した修正項目は、

層：初期感覚で22項目、層：知覚段階で15項目、層：象徴化で9項目、層：概念化で10項目であった。

令和3年度(2021)は、特に層：象徴化、層：概念化の評価項目について、実態に即した新たな評価の必要性を検討した。これまで層：象徴化は一つのステージとして位置づけており、ことばやイメージの形成に伴う適応性の高さに焦点を当てた理解がなされてきた。しかし、近年の実態として臨床的には一見ことばで簡単なやりとりは成立しているようであっても、実際にはことばとイメージ(予想・見通し)が十分につながっておらず、共有性や柔軟性、情緒的安定性が大きく揺らぐ事例が少ない傾向にある。そこで、層：象徴化を二つのステージに分け、その上で、より詳細な実態把握につながるようチェックリストも修正・追加した。その結果、4層9水準、全体で569項目からなる改訂版「感覚と運動の高次化チェックリスト2021」を作成した。

令和4年度は、令和3年度に改訂版として整理した「感覚と運動の高次化チェックリスト2021」を用いてセンターに通所する39名の児童・生徒の実態把握に活用し、さらなる内容の検討を重ね「感覚と運動の高次化チェックリスト2022」を作成した。一連の改訂の過程で層：象徴化を新たに2つのステージとした意味と根拠について、研究代表者が発達

表1 象徴機能の発達指標の再検討の視点(池畑, 2022)

象徴機能の発達指標(宇佐川)	検討の視点	象徴化I・IIの再編成の視点
<p>◆象徴機能の発達指標</p> <p>道具操作模倣</p> <p>動作模倣</p> <p>指さし行動</p> <p>象徴機能の発達</p> <p>象徴あそび(脱文脈化)</p> <p>象徴遊び(統合化)</p> <p>言語理解と発語の状況</p> <p>言語理解</p> <p>名詞(10語以上)</p> <p>動詞(5語以上)</p> <p>用途理解</p> <p>2語文の理解</p> <p>3~4語構文の理解</p> <p>発語状況</p> <p>2音節単語</p> <p>4音節単語</p> <p>2語構文</p> <p>3~4語構文</p> <p>重文・複文</p>	<p>・象徴遊びの構成要素に焦点化されている(木片素材でも見立てて遊ぶか、切る・炒める・食べるなど行為の繋がり等)。</p> <p>・遊びが成り立つ場面の分析や遊びを介した他者との交わりは含まれていない。</p> <p>・現前に対象物がある中での言語理解に焦点化されている(絵カードを指す等)。</p> <p>・イメージ力がより求められる他者からの質問や指示理解の評価は含まれていない。</p> <p>・文字通り発語としての評価が中心で、コミュニケーションとしてのことばの使われ方の評価は含まれていない。</p>	<p>遊びが成り立つ前提として、大人が構造を作り導くことが必要か否かは象徴機能の育ちの段階を反映していると考えた。大人が場面を作ると<u>ぶつこ</u>的な遊びに参加する。絵本などの手がかりに沿って遊ぶ姿を象徴化Iとした。象徴化IIは<u>自発的な見立ての力</u>やストーリー化、<u>大人が子どもの遊びに合わせる</u>ことでやりとりが成立する姿を重視した。</p> <p>象徴化I、IIとも現前に対象物がある中での基礎的な理解言語の確かめは残しつつ、生活や活動場面での指示は最終的に視覚的な情報を必要としている段階を象徴化Iとした。象徴化IIは経験に沿った内容であればことばで概ね理解できる姿を重視した。</p> <p>発語については尋ねられれば自分の経験、行動の意図等は単語であってもことばにでき、大人が話題に合わせるとやりとりが成立する姿を象徴化Iとした。象徴化IIは経験内容の言語化が広がり、自分のことを話そうとする姿を重視した。</p>

「 層 象徴化の世界の発達理解と再考 - 象徴化 ・ の新設に向けた整理 - 」と題して発達臨床研究第 39 巻に執筆した。

## ( 2 ) 教材教具を活用した系統的な学習指導のステップ化

主に感覚や運動、知覚的理解と操作の発達および前言語機能にかかわる諸側面の充実をねらいとする初期段階の指導事例について、詳細は以下の論文で報告をおこなった。

- a.池畑美恵子 (2019)「 層 初期感覚の世界の発達理解 - 知恵の発達と自己像の読み取りを中心に - 」発達臨床研究第 37 巻
- b.池畑美恵子 (2020)「 身体的共有を基盤にして初期段階の子どもの発達支援 」発達臨床研究第 38 巻
- c.池畑美恵子 (2023)「 < 間 > の育ちから考える関係性とコミュニケーション - 話しことばを持たない自閉症幼児の臨床実践より - 」発達臨床研究第 41 巻
- d.富澤佳代子 (2023)「 発達初期段階の子どもの育ちの理解と学習活動 - 行動の始点を育て、終点の理解に向かって - 」発達臨床研究第 41 巻

本報告では、上記の研究を総括し初期段階での学習指導として 5 つのステップを提示したい。

姿勢の安定・保持への働きかけと並行したリーチングと面の受容 - 姿勢が保てることで教材に手が伸びる、あるいは魅力的な教材に手を伸ばしたいために姿勢を保とうとする、そのどちらも可能性があり、姿勢と教材を対に見ることが重要である。そのうえで、触覚や振動、音の刺激受容を高め、触れる、なでるなど面の受容を育てる。

音や光、重みといった応答性の高い教材を用いた終点の形成 - < 触れる / 叩く > といった操作から徐々に < すべらす / 押し続ける > < 入れる > といった意図的操作に展開する。特に容器に物を < 入れる > 操作は非常に重要度が高いと考えられる。

視覚でとらえ調節的操作を促す教材を用いた操作の拡大 - 視覚によって運動を組み立て、調節できるようになることをねらい、輪抜きやスライディング教材を用いて「運動を方向づけ終点に向かう学習」や「見分けて終点に向かう学習」を育てていく。

見分けの教材を用いた洞察的弁別の形成 - 異なる形状の 2 種の物を入れ分けるなどいわゆるプットインと呼ばれる学習教材を用いるが、そこで運動が先行し試行錯誤しながら入れきる学習から徐々に、視覚が先行する洞察的な弁別学習に導いていく。

物の永続性や終点の幅を広げた教材を用いた記憶と手段の形成 - 二つの箱の片方に入れた玩具を記憶し取りだす位置記憶の学習などが重要な意味を持つ。記憶という知恵の育ちだけではなく、手段の連鎖や “ 手を出さず一瞬待つ ” 静観性を意味する。

次に、象徴機能やイメージ、ことばの獲得以降で課題となる系統的な数概念の学習指導について、明らかにし以下の論文にまとめられた。

- a.横田千賀子 (2021)「 発達につまずきを示す子どもの数量概念の育ちに関する予備的研究 - 3 事例の検討より - 」発達臨床研究第 39 巻
- b.横田千賀子 (2022)「 発達につまずきをもつ幼児の数量概念に関する臨床的研究 」発達臨床研究第 40 巻
- c.横田千賀子 (2023)「 層段階の数量概念学習の捉えと学習活動の展開 - 数学習の基礎段階の取り組み過程の分析より 」発達臨床研究第 41 巻

本報告では、上記の研究を総括し系統的な数量概念学習の展開に向けて、以下 3 つの指導ステップを提示したい。

はじめに、学習活動の中で数や数字を扱うこと自体は比較的取り入れやすいが、実際の児童・生徒の受けとめとして「数字や数唱」をパターンとして覚え唱えたりできて、概念としてその本質を理解するには基礎段階からの取り組みが重要となる。本研究では、図1の通り「数学習の基礎段階」を設け、具体物を用いた弁別や構成などの基礎的認知や空間把握、大小/長短を中心とする系列化学習の重要性を指摘した。特に系列化学習では、事物を一方に並べるといった視覚-運動操作系の発達との関連が示唆された。

次に数量概念形成期として、具体物の取り出しを中心に数と運動(量)を一致させる学習段階を設けた。ここでしばしば取り出しや計数の際に操作的な安定さに欠く事例や聴覚-運動協応に課題をもつがために正確な計数行為が持続しない事例があり、これらのつまづきを見通して前段階の数学習の基礎段階の充実を図ることが重要であると考えられた。また、5までの数量を取り出せるようになった後は、取り出しと合成分解を並行して進め、パターン学習にとどめないよう効果的に学習内容やレベルを前進させたり、時に基礎に戻ったりしながら意図的に揺らしをかけた展開の重要性が示唆された。

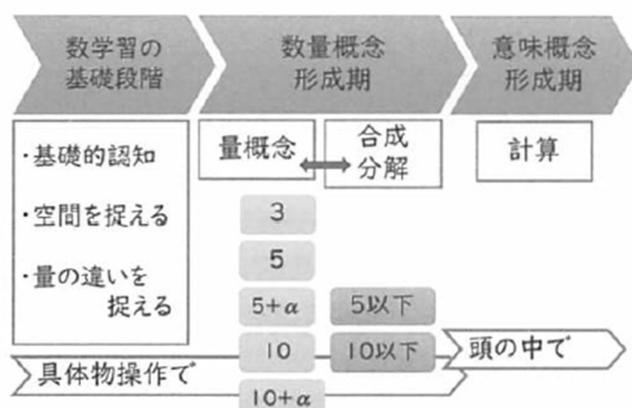


図1 発達臨床研究センターにおける数の学習ステップ

なお、これまでチェックリスト項目に十分反映されていなかった数量概念の評価項目について、「数概念の基礎となる力」「数処理」「数概念」「計算」「文章題」の5つの枠組みで評価項目を設定しており、今後それらの評価についても実践での有用性を検証していきたい。

なお、本研究の主要テーマである実態把握について現職指導員・教員からの情報を収集しつつ、研究成果の取りまとめと報告の場として以下のセミナーを開催した。

#### 1) 感覚と運動の高次化セミナー

##### 2019年(令和1)11月30日 第11回 感覚と運動の高次化セミナー

- 講 感覚と運動の高次化チェックリストの実践的活用と課題(池畑美恵子)
- 講 層、層の主要チェック項目と評価の実際(池畑美恵子)
- 講 層、層の主要チェック項目と評価の実際(富澤佳代子)
- 講 チェックリスト改訂に向けた論点整理と質疑応答(池畑美恵子/富澤佳代子)

##### 2022年(令和4)11月5日 第12回 感覚と運動の高次化セミナー

- 講 感覚と運動の高次化理論における実態把握の視点(富澤佳代子)
- 講 層の発達理解 身体的共有を基盤に感覚と運動の調整を促した初期段階の事例(池畑美恵子)
- 講 層の発達理解 パターンの認知から行動調整力が芽生えた小学部児童の事例
- 講 ワークショップ 映像観察による発達評価、ポイント解説

##### 2023年(令和5)11月11日 第13回 感覚と運動の高次化セミナー

- 講 感覚と運動の高次化理論にもとづく発達理解(池畑美恵子)
- 講 層の発達理解 知覚運動水準の子どものとらえと学習活動(富澤佳代子)
- 講 層から層の発達理解 幼児期~学童期にかけての6年の支援から(菊地尚美)
- 講 ワークショップ 映像観察による発達評価、かかわり検討

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計15件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 池畑美恵子	4. 巻 40
2. 論文標題 発達支援における意図的かかわり 教室環境と人環境の整理に向けて	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 発達臨床研究	6. 最初と最後の頁 1 - 10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 富澤佳代子	4. 巻 40
2. 論文標題 自傷を伴う行動問題を抱える自閉スペクトラム症児への 発達支援	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 発達臨床研究	6. 最初と最後の頁 11 - 20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 横田千賀子	4. 巻 40
2. 論文標題 発達につまずきをもつ幼児の数量概念に関する臨床的研究 層へむかった事例を通して	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 発達臨床研究	6. 最初と最後の頁 21 - 31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 池畑美恵子	4. 巻 39
2. 論文標題 層 象徴化の世界の発達理解と再考 - 象徴化 ・ の新設に向けた整理 -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 発達臨床研究	6. 最初と最後の頁 1 - 14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 富澤佳代子	4. 巻 39
2. 論文標題 発達支援における絵本 - 発達段階に応じた教材としての活用 -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 発達臨床研究	6. 最初と最後の頁 15 - 25
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 横田千賀子	4. 巻 39
2. 論文標題 発達につまずきを示す子どもの数量概念の育ちに関する予備的研究 - 3事例の検討より	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 発達臨床研究	6. 最初と最後の頁 27 - 35
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 池畑 美恵子	4. 巻 38
2. 論文標題 身体的共有を基盤にした初期段階の子どもの発達支援	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 発達臨床研究	6. 最初と最後の頁 1 - 10
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 富澤 佳代子	4. 巻 38
2. 論文標題 感覚と運動の高次化理論によるアセスメントと発達支援 発達のアンバランスを抱えた低出生体重児の支援から	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 発達臨床研究	6. 最初と最後の頁 11 - 20
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 横田 千賀子	4. 巻 38
2. 論文標題 層 知覚水準の子どもの発達支援の実際 自閉症幼児の3年間の療育経過より	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 発達臨床研究	6. 最初と最後の頁 21 - 31
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 菊地 尚美	4. 巻 38
2. 論文標題 学齢期発達障がい児の学習支援 幼児期からの育ちを通して	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 発達臨床研究	6. 最初と最後の頁 33 - 42
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 池畑美恵子	4. 巻 37
2. 論文標題 層 初期感覚の世界の発達理解 - 知恵の発達と自己像の読み取りを中心に -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 発達臨床研究	6. 最初と最後の頁 1 - 10
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 富澤佳代子 (研究協力者)	4. 巻 37
2. 論文標題 感覚と運動の高次化理論における象徴化水準の発達課題と臨床支援	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 発達臨床研究	6. 最初と最後の頁 11 - 20
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 菊地尚美 (研究協力者)	4. 巻 37
2. 論文標題 発達につまずきのある学齢児の数学習の系統性に関する一考察	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 発達臨床研究	6. 最初と最後の頁 29 - 31
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 池畑美恵子	4. 巻 36
2. 論文標題 層 知覚水準の発達理解と支援 実践課題と中核テーマの整理に向けて	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 発達臨床研究	6. 最初と最後の頁 1 - 12
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 富澤佳代子	4. 巻 36
2. 論文標題 前言語段階の自閉症児に対する療育支援 - 教材教具の役割、自己像の発達 -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 発達臨床研究	6. 最初と最後の頁 13 - 21
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 堀内友貴・池畑美恵子
2. 発表標題 障害のある子どもの成育歴情報からみる発達理解
3. 学会等名 日本発達心理学会第31回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 池畑美恵子
2. 発表標題 発達臨床におけるピグナーセラピストの教授行動に関する研究(3) 身体・動作的関与のあり方に注目した検討
3. 学会等名 日本発達心理学会第30回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 富澤佳代子
2. 発表標題 重度障害者の療育支援 - 感覚と運動の高次化によるアセスメントを活用して -
3. 学会等名 日本発達心理学会第30回大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 池畑美恵子	4. 発行年 2020年
2. 出版社 学苑社	5. 総ページ数 150
3. 書名 感覚と運動の高次化理論からみた発達支援の展開	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	富澤 佳代子  (Tomisawa Kayoko)		

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	横田 千賀子  (Yokota Chikako)		
研究協力者	菊地 尚美  (Kikuchi Naomi)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関